観音菩薩の宗教 ⑮

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

光明皇后と女人済度の十一面観音菩薩

日本における観音菩薩の信仰は『法華経』の伝来とともに飛鳥時代に始まった。文化史の見方によれば、飛鳥時代とは聖徳太子を先導者として都の飛鳥地方を中心に仏教が日本に根を下ろした時代をいう。西暦でいうと仏教が弘通した五三八年から大化改新のあった六四五年までを指す。大化改新とは、聖徳太子の一族であった蘇我氏が滅ぼされた内乱であった。つまり飛鳥時代とは、蘇我氏による仏教護持の時代である。大化改新以後、仏教を根付かせた聖徳太子や推古天皇の系譜に連なる蘇我氏は表舞台から消えていくが、飛鳥仏教の芽は次代も枯れることはなかった。

大化改新から七一〇年に平城遷都されるまでの白鳳時代、七一〇年から七九四年に平安遷都されるまでの天平時代は、飛鳥時代に蒔かれ芽吹いた仏教がさらに開花していく時代であった。これら三つの時代のなかで、飛鳥時代の文化財は極めて古く稀少である。飛鳥仏などを見学する機会があったならば、幾星霜を経て今日まで残った奇跡に思いを馳せるべきであろう。

他方、貴重であることに変わりはないが、白鳳時代から天平時代にかけての仏教文化財となるとその数が飛躍的に増えてくる。白鳳時代の仏教の担い手は天武天皇と、その皇后であった持統天皇である。天武天皇は壬申の乱を体験したのち即位したため、仏教寺院を建立することにより国家の安泰を願った。仏法によって国家の安穏をはかること鎮護国家といい、天武天皇はその実現のために寺院建立を促進した。平安時代に書かれた史書『扶桑略記』によれば、持統天皇六年（六九二）には寺院の数が「凡そ五百四十五」であったとされる。推古天皇三十二年（六二四）に調査した寺院数が四十六ヶ寺であったから、約七十年のあいだに十倍以上に増えたことになる（森郁夫・甲斐弓子『僧寺と尼寺』帝塚山大学出版会）。

その後、鎮護国家の思想と政策は天平時代の聖武天皇に継承され、さらに組織的に拡大した。その象徴的な政策は、国分寺と国分尼寺を全国に建立し、そのターミナルとして東大寺と法華寺を創建したことである。聖武天皇は自らを「三宝之奴」と称し、后の光明皇后とともに仏教興隆に生涯を捧げた。三宝の奴とは、仏教の根幹である仏法僧に従う召使いという意味である。

聖武天皇は大宝元年、天武天皇の第一子として誕生した。この年、大宝律令が制定され、日本は天皇を中心に国家としての礎を築き始めていた。血統的にも政治的環境

十一面観音菩薩立像　法華寺蔵(写真提供・法華寺)

にも恵まれていた聖武天皇であったが、その生涯は幼少時より多くの苦難と不安に満ちていた。その一部を列挙するだけでも、長屋王の変や天然痘の流行、さらには勅に従わず反乱を起こし怨霊にまでなった藤原広嗣の乱などが矢継ぎ早に起こっている。天平時代の社会不安は、そのまま聖武天皇の苦患であった。そのうえ七歳の時に父の文武天皇が崩御し、母の宮子が重い精神疾患に陥るなど、成育環境においても苦悩した。こうした背景が聖武天皇の信心にあったことは間違いない。

聖武天皇に隠れがちであるが、光明皇后が日本の文化史、ことに仏教文化に残した事績も特筆しなければならない。聖武天皇は藤原不比等の孫、光明皇后は藤原不比等の別の妻の娘になるが、二人は同い年であった。光明皇后は、これまで皇族に限られていた皇后に民間から初めてなったことでも知られている。順風満帆に見える光明皇后の生涯であるが、父の不比等の死や、聖武天皇とのあいだに生まれた幼い皇太子の死、さらには四人の兄弟を天然痘によって一時に失うなど、相次ぐ親族との別れに深く心を痛めた。光明皇后が仏教に篤い信心を持ったことは、聖武天皇と同様であった。光明皇后は聖武天皇の存命中は大御心を支えたとされるが、むしろ率先して文化事業を推進したことも明らかになってきている。『続日本紀』には、「東大寺及び天下の国分寺を創建するは、本、太后の勧むる所なり」とあり、聖武天皇の施策に光明皇后の意志が深く関与していたことが指摘されている（瀧浪貞子『光明皇后』中公新書）。

光明皇后は仏教を自心の救いとするだけでなく、慈悲の実践によって社会にも還元した。その代表的な例が皇后宮職（皇后付きの役所）に設けた悲田院と施薬院である。前者は孤児や貧者を救う施設、後者は病人に薬を与え治療する施設で、薬の購入費用は父・不比等から相続した財産などから出した。伝説によれば、光明皇后は病人を風呂に入れ、その病人の膿を口で吸い取ったともいわれる（森郁夫・甲斐弓子、前掲書）。不比等から相続した土地には、はじめ皇后宮が置かれ、それが平城遷都に伴って宮寺に替えられた。その寺が遅くとも天平十九年（七四七）には法華寺と呼ばれるようになった。全国の国分寺の代表が金光明四天王護国之寺すなわち東大寺であり、国分尼寺の代表となったのが法華滅罪之寺、すなわち法華寺である。女性のための寺院が男性の寺院と同様に国家により全国規模で整備されたことは、世界の文化史上、類を見ないことといってよい。

法華寺が光明皇后の発願によって建立されたこと、尼寺の中心の寺となったことは、『法華経』や『金光明経』の説く女人済度の思想と関係が深い。光明皇后は唐より帰朝した僧の道慈よりそれらの経典の講義を受けており、その思想を実践したのが法華寺建立とされる。皇后の諱は安宿媛であるが、天平十二年（七四〇）より光明子と称するようになった。その根拠は『金光明経』「滅業障品」に出る「福宝光明」から来ているとする説が有力である（瀧浪貞子、前掲書）。光明皇后が天平六年（七三四）に法隆寺の東院を造営し、のちにそこで毎年『法華経』を講義させるようにしたのも、『法華義疏』を著した聖徳太子に対する崇敬とともに、『法華経』そのものへの帰依があったからであろう。なかでも光明皇后が女人済度の思想に心を動かされたことは間違いない。

こうした背景を有する法華寺の本尊は、十一面観音菩薩立像（国宝）である。その制作は九世紀前半と考えられ、当代の一木彫像の頂点に立つ傑作と評価されている（文化庁監修『国宝5 彫刻Ⅱ』毎日新聞社）。異説もあるが、観音像は光明皇后の手作りとも、絶世の美人であった皇后がモデルとなったとも伝えられている。像の表面は髪・眉・唇・髭などに彩色されているほかは木肌をそのまま残している。踏み出した右足の親指が反っており、まさに今、衆生済度のために前に進もうとする躍動感、ダイナミズムが見て取れる。先に見たチベットやモンゴルの緑ターラーが坐像ながら右足を降ろしていることと思想的に通ずるものがあろう。観音菩薩は変成男子と称され、男女を超えた菩薩とされるが、この像の腰の曲線とくびれは女性を想起させ、まさに女性を救う菩薩として信仰された光明皇后創建の尼寺の本尊に適う姿である。